第一節　第二体育館・中ホール完成

一、第二体育館改装

かねてから要望の高かった四〇〇人程度の収容が可能な中ホールの建設が考えられていたが、第二体育館一階に新設されることとなった。平成三年の夏休みに、改修・整備されたが、この一階の部分は、女子バスケットボール部の練習場であり、また、一般の体育指導の場として使用されているものであった。したがって、それは常置のものではなく必要時に「中ホール」として使用するもので、日常は、スポーツ施設として使用することを妨げるものではない。

工事は、天井の改修、照明器の設置（水銀灯）、はめこみスピーカーの設置、塗装、特にスピーカーについては施設が広いこともあって、性能の良いものが選ばれ、前後左右四個のスピーカーが設置された。また、照明もより明るくということで、水銀灯が選ばれ、一二灯がつけられた。

移動用ステージは、創立五十周年記念式典の折に使用されたものを活用し、塗装も新たにした。

整備された第二体育館・中ホール

ステージを作るにあたっては、濃紺の引き幕を後ろに引き、左右に、斜めにグレーの幕が引かれることとなり、その色合いがとてもシックですばらしかった。幕の長さが二〇メートルもあり壮観であった。

また、ここで映写もできるようにということで、取り外しのきく、映写スクリーン設備が整備され、必要な時はいつでも使用できるようになった。その他、窓には、それぞれグレーの厚手の不燃繊維によるカーテンが掛けられた。これは映写の折に場内を暗くしなければならないので、暗幕として整備されたものである。

最後に椅子が五〇〇名分整備されることとなったが、色は金茶・赤・グレーの三色で、どの色も落ち着きのある品の高いもので、全てを並べて見た時には体育館には見えぬ、すばらしい「中ホール」に変身していった。

二、秋の二大行事

平成三年の体育祭は「輝く明日への飛翔」をテーマに昼休みの企画や、体育祭の準備等を生徒会中心に行った。しかし、十月六日の中学校体育祭は、雨のため午後の部を中止、十月十日の高校体育祭は、台風のため延期となり、十四日に開催されたが、また、雨のため午後の部が中止となった残念な年であった。

文化祭は、十一月三日の公開日には、五、〇〇〇人の来会者があり、美術部の「ミレーの落穂拾い」の大壁画、大講堂での演劇・箏曲・吹奏楽・合唱の華やかな発表も見られた。また、夜の後夜祭では、火を囲んで生徒とともにダンスをする奨学会・母姉会の方々も見られた。

「菊の香薫る文化祭」として前年に引き続いて市川市菊華会副会長の吉野武三郎さんのご指導を受けた。菊作りは河野静雄先生、そして園芸部の生徒達が、「兼六白菊」「兼六香菊」「岸の詩」という菊を一年間かけて育て、文化祭終了後も一ヵ月間図書館前で大輪の菊を楽しんだ。

三、進路指導の発展

平成三年度の就職希望者の数は、普通科・商業科を合わせて七四名であったが、就職指導担当は、学年と連携を密にし学力向上に努めると同時に個々の企業ニーズに合わせた個別指導を一人一人に実施した。富士銀行・三菱銀行・住友金属工業・日本鋼管をはじめとする一流企業に就職した。一方、進学指導も、模擬試験等を最大限活用し、研数学館との連携を密にし、更に、学習施設としては、新たに宿泊施設（四〇名）を備えた教学館が建築され、勉強合宿も実施された。この夏は、文系の勉強合宿が六泊七日、理系が七泊八日実施され、栄養専門学校の協力のもと、河野静雄進路指導部長（当時）手作りによる食事が提供された。ある日のメニューには、「朝・フランスパン、スクランブルエッグ、ウインナーソーセージ、サラダ、ジュース」「昼・ソーメン、野菜天ぷら」「夜・和風ハンバーグ、おろし大根、付け合わせ（もやし、ねぎ、なす）、吸い物（貝割れ大根、豆腐）」となって生徒達は合宿で太ってしまったとぼやくものもいたようだ。このためもあってか、進学成績も向上し、名門校にも合格者を出している。ただ、史上空前の厳しい大学入試のためか、今の成績で無理なく合格でき、早く進路を決めたいという安全志向が強く出るようになった。

第二節　学院長先生胸像建立

一、交換留学生

平成四年六月二十九日から一週間、本学院に交換留学生のクリスタル・ダークマンさんが学んだ。夏のホームステイで訪れるアメリカ・カリフォルニア州コンコードに住むプライベート・スクールの五年生の生徒であった。

彼女は、約半月間の来日期間のうち一週間を本学院の生徒の家で過ごした。学校では、松尾千代乃先生のクラスに属し、書道の授業も受けながら日本の高校生活を送った。

二、学校週五日制実施

二十一世紀をめざした学習指導要領改訂への対応の一つとして、平成四年の九月より月一回、第二土曜を休日として実施した。この制度は、教育水準を落とさないように配慮して、学級活動・クラブ活動などのゆとりの時間を縮小し、学校行事の精選化をはかり、カリキュラムを改正した。このため秋の文化祭は、例年の三日間から二日間に短縮され、学校行事の精選化の一環となった。

三、第四回千葉県私学教育研修集会（理科）

平成四年九月二十二日、本校を会場に第四回千葉県私学教育研修集会（理科研修会）が実施された。午後からは、公開授業の質疑応答、齋藤誠一先生から「理科教育での酸性雨・大気汚染調査の試み」の研究発表、昭和学院栄養専門学校教授・学術博士の藤森泰先生から「日本における食環境の現状と問題点」の講演があった。県内私立の約一〇〇名の先生方が参会された。

授業内容	クラス	教室	担当教諭
物理・波動	3B1	第二物	河野静雄
化学・酸と塩基	2B1	第一化	辻田伸也
生物・動物の発生	2A4	第一生	浅田聡
地学・太陽の活動	3D1	第一物	佐久間直次

四、胸像建立

平成四年十一月二十日午前十時、大講堂前前庭において学院長先生の胸像の除幕式が挙行された。前夜からの雨で、除幕だけを外で行い、その後の式は講堂内で行われた。胸像制作は、五月半ばに、日展審査員・評議員の神野義衛氏に依頼し、十一月初めに完成した。台座は、岡山産

伊藤一郎学院長胸像除幕式

の万成石（赤みかげ石）を用いている。また、碑文は、毎日書道展審査員の那須大郷氏の筆であった。この建立は、学院長先生の勤続五十年の節目にあたり、鈴木忠男胸像建立委員会委員長が中心となり、ご父母の協力のもと実現する運びとなった。

五、自分らしさの読書を求めて

平成四年十一月十一日から二十一日まで「読書旬間」が設定された。文化講演会、読書会、CDと朗読を聞く会など多彩な催し物が行われた。さらに、図書館教育研究会が、前浦安市立図書館館長・竹内紀吉氏をお招きして、「生涯学習と図書館」と題した講演があった。一方、中学校の穴田由季さんが県青少年読書感想文コンクールで最優秀に入賞した。「アルジャーノンに花束を」から学んだ、人間らしく生きることについて記述したものであった。

新築された理事長室

六、理事長室完成

学校の正面玄関から入り、事務室にとなりあわせて、理事長室があった。二十年ほど前に狭いために一部増築をした。その部分が鉄骨造りのために、屋根、窓枠が腐食して、雨漏りがはげしく、その改修が懸案であった。こ

の際、腐食部分を廃棄して新たに建築することとなり、吉永設計事務所に設計を依頼し、大城組に施工させることとなった。新しい理事長室は、一階に玄関・理事長室・応接室があり、二階に来賓室・会議室・洗面所などを備えていた。

平成四年六月に基本設計が完成、八月初旬に許可を得て同月下旬に旧理事長室を取り壊し、九月から工事が進められ、翌五年二月三日に竣工、引き渡しが行われ、二月八日のテープカットとなったものであった。建物は、近代的なしかも重厚なもので、理事長室としてふさわしい立派なものであった。

七、精選激戦の大学入試

現浪合わせて一一七万人の受験生が挑む平成五年度入試は、私大のセンター試験参加に伴い、一〇三名が受験、一九名が二次出願した。研数学館との「センター試験対策指導システム」タイアップもあった。国際基督教大学二名、東京女子大学二名、早稲田大学一名をはじめとして大学に一二一名（延べ一七八名）、短大にも上智短期大学二名、青山学院女子短期大学一名を含む二八三名（延べ三七七名）が合格した。

第三節　学院紹介映画「理想に燃えて」完成

一、バトン部世界大会へ

昭和学院高等学校バトン部は、平成五年六月二十日、東京都北区滝野川体育館で開催された第九回ドリルチーム世界大会の東日本代表選出大会に出場し、見事世界大会初出場を決めた。

二、「理想に燃えて」完成

昭和学院の紹介映画「理想に燃えて」が一年をかけて制作、完成されたばかりで第一学期の父母会で上映された。父母会は、平成五年六月二十四、二十五日に昭和学院大講堂で行われ、学院長先生の教育講話で家庭における自主学習を進めること、最近の青少年の行動についてなどを述べられ、夏休みを有意義に過ごすようにというお話があった。その後「理想に燃えて」の上映に入り、昭和学院の紹介がなされた。

三、私学教育功労賞

平成五年度私学教育功労者として本校から、河野静雄先生、村田勝先生、林恵一郎先生の三名が表彰された。十二月四日に千葉市のホテルで表彰式が行わ

平成５年度教職員

れた。後日、本学院主催の受賞祝賀会が市川で開催されそのご功績が披露された。

四、車椅子を寄贈

平成六年二月二十四日、昭和学院中学校が一円玉募金とプリペイドカードの収集成果により市川市に車椅子を二台寄贈した。この三年間で高等学校とあわせてリングプル等の収集で合計五台の車椅子を寄贈し、市川市の社会福祉に活用された。

第四節　伊藤友作先生、市川市名誉市民章受章

一、市川市名誉市民章

平成六年十一月三日、本学院の創設者である伊藤友作先生が、私学振興の先駆者として私学教育に尽力された功績により、市川市名誉市民章を受章された。その功績は「昭和十五年に昭和女子商業学校を創立、戦後の混乱期の困難を乗り越えて、『明敏謙譲』の人間づくりを教育理想に掲げ、幼稚園から短期大学まで一貫教育の学園を築き上げ、その生涯のすべてを教育に捧げられた」（「市川市名誉市民」より）ものである。今回の表彰は市川市制施行六十周年記念式典で名誉市民証の贈呈式が行われ、伊藤一郎学院長先生が市川市長より、名誉市民章、名誉市民証並びに記念品をお受け取りになった。なお、本学院中高文化祭では学院創

設者の名誉市民の栄誉を記念し、特別企画「創設者伊藤友作先生　市川市名誉市民章受章」記念顕彰展が行われ、勲四等章・勲記、藍綬褒章・章記、従五位叙位記、胸像レプリカ、肖像画の写真等が展示された。

伊藤友作先生紹介（『市川ひと事典』より）

伊藤友作先生は、二十八年間勤めた公立学校を定年退職した後、昭和十五年昭和女子商業学校を創立した。戦後は学制改革により昭和学院のもとに、小・中・高・短期大学を併設し、本格的に私学経営に取り組むことになった。

入学者を多く集めるために、できるだけ経費を少なくし、よりよい教育をすることが先生の私学経営の持論であった。

いろいろの印刷物は必ず裏に書いてあるものを使い、「私は紙を無駄にしなかった何十年のお金で、この建物（現在の視聴覚館）ができました」と言ったといわれ、無駄遣いを嫌い、体裁を飾らず、学校経営の資金に注ぎこんだ。

また、授業中に先生が入ってくると、教壇の前の紙屑を拾い、ポケットの中に入れて出ていったなどの話が残るが、紙屑が散っていたりすることを管理が行き届かないと嫌い、朝の庭掃除を作業教育の一つにした。もう一つ管理を厳しく指導したのは、「火の用心」である。

先生は、学校が生活そのものであった。通勤では仕事ができないとして、学校の宿直室に泊まり、週一回

帰宅し、特に戦後の混乱期、私学経営は困難を極め、不眠不休の毎日であったという。また、千葉県私学団体、千葉県私立中高学校協会に参加し、県下の私学発展にも寄与した。

二、市川市名誉市民顕彰碑建立

平成六年三月四日、伊藤友作先生が市川市名誉市民章を受章され、この栄誉を讃えるとともに長くそれを顕彰しようと大講堂西側の庭園内にある伊藤友作先生の胸像の右に名誉市民顕彰碑を建立、同日除幕式が行われた。名誉市民顕彰碑には、「平成六年十一月三日本学院創立者伊藤友作先生の市川市名誉市民としての推称を記念してここに顕彰碑を建立する。平成六年十二月吉日、昭和学院及父母有志」と刻まれた。

名誉市民顕彰碑

三、フィギュアスケート初優勝

平成七年一月二十日より始まった全国高等学校スケート競技選手権大会のフィギュア競技で川崎由起子さん・大塚路子さん（高二）、柴崎澄子さん（高一）が出場し、学校対抗（一六三校中）で第一位、個人でも（一九三名中）川崎さんがフィギュア女子Aで第二位の成績をあげ、全国大会初優勝の栄誉に浴した。

四、ボランティア活動

平成七年一月十七日、阪神・淡路大震災が発生した。死者六千余を超え、負傷者は十万余、倒壊家屋は十万戸を数え、想像を絶する悲惨極まる大災害となった。本学院では教職員・父母・生徒から見舞金を募り、四〇〇万円の義捐金を送った。またこれを機にボランティア活動の気運が高まった。

第五節　創立五十五周年記念

平成七年十一月十九日（日）、昭和学院大講堂において「昭和学院創立五十五周年記念式典」が挙行された。天候に恵まれ、式典当日は、先代理事長・創設者伊藤友作先生の命日にあたり、市川市名誉市民顕彰碑・伊藤友作先生胸像の前には大輪の菊が飾られ、周囲は清々しい薫りに包まれていた。

式は、荘厳な雰囲気の中、合唱団による校歌が響き渡り、伊藤一郎学院長先生の式辞の中では、創立五十五年に及ぶ学院の歴史を振り返り、その感慨と将来のご抱負が述べられた。続いて本学院功労者（六名）への感謝状と本学院永年勤続職員への表彰状が授与された。式場には来賓として、元文部大臣の井上裕参議院議員をはじめとして、元文部大臣の森山真弓参議院議員、高橋国雄市川市長、狩野勝衆議院議員、井奥貞雄衆議院議員、県私学代表として上野国彦千葉県私立中学高等学校協会会長等がご臨席され、心温まる祝辞を

いただいた。また沼田武千葉県知事、元文部大臣の石橋一弥衆議院議員等の祝意に満ちた祝電の披露、本学院卒業生母娘競演による祝舞・長唄「老松」は式場を魅了し、ムードを盛り上げた。なお、前日の十八日は大講堂にて学内式典が挙行された。

式辞

学院長　伊　藤　一　郎

本日は、本学院創立五十五周年の式典に皆さま多数ご臨席下され、この記念すべき式典を盛大に挙げることのできますことを私たち深く喜びとするとともに、心よりお礼申し上げます。

本学院は昭和十五年四月、この東菅野の地に創設されました。時は戦前・戦中というわが国の激動の時代であり、学校づくりには幾多の苦難を体験しました。昭和二十年八月、戦争は終結しました。しかし戦後の社会はきびしい試練を強いられました。しかもこの戦争の疲弊の中に、教育の普及と発展を目指して学校制度の大改革、いわゆる六・三制が実施されました。

国力の著しい衰退の折に、この大改革の実施はわが国にとり苦しく困難なことでありました。本学院は新制度に基づいて、従前の学校制度を改め、新たに中学校・高等学校の設置に努めました。つづいて小学校・

創立55周年記念式典

短期大学を新設することができました。この後、地域社会の要望もあり栄養専門学校及び幼稚園を併置しました。

このように、学校規模の急速な拡充により、教育諸施設の整備・教育内容の向上にややおくれがでてきました。昭和三十年頃からは、専ら施設設備の整備に努めました。校舎の鉄筋化、特別教育施設の充実、実験実習の施設の改善、更に教育の近代化のために視聴覚教育、放送教育、語学や情報教育施設、また図書館教育の発展に努力しました。他面、体育諸施設の拡充をはかり、体育館・室内プールなどの新築、グラウンドの新設がなされました。この頃より本学院のスポーツの成績は向上し、高校はバスケットボール・ハンドボールなど全国優勝を果たし、また短大はソフトテニスで大学対抗に優勝しました。水泳なども全国高校の最強チームとして活躍しました。スポーツの発展は学校に活力をあたえて、生徒・学生の学習成績は高まり、漸次本学院の実績をあげることができました。昭和五十八年には、高校急増に当たり、千葉市幕張の地に秀英高等学校、つづいて附属中学校を設置しました。既にこれらの学校も開校十三年を経過し、教育施設が整備し、教育の向上発展を見ております。

本学院教育は建学の目標にもとづいて、明るく健康で謙虚な意欲的子女の育成を目指して質の高い行き届いた教育の実践を目指してきました。星霜めぐり本年は本学院創立五十五周年を迎えました。五十五年という節目に当たります。節目というものは樹木のくぎりの所であり、そこから新しい樹木が育つのであります。一つの時代を経て新しい時代に入るのであります。

創立五十五周年という節目に当たり、半世紀余にわたり、各方面からお寄せ下されたご厚情に感謝し、私たちは本学院の歩んだ道をふりかえり心を新たにして教育の充実と発展に努めたいと思います。今後ともご協力下されますようお願いします。なお、創立五十五周年を記念して、永らく木造校舎でありました栄養専門学校本館を改築して、本年度内に新校舎が完成する予定であります。建物は三階建て鉄筋造り、一、四二〇平方メートルで、内部の施設設備を完備して、一段と学習・研究に役立つものにしたいと思っております。

これからの一層の努力をお誓いし、式辞といたします。

祝辞

元文部大臣　森　山　真　弓

創立五十五周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私と昭和学院の関係は、学院長伊藤一郎先生の奥様が、私の女学校の時の担任の先生でありまして、現在でもクラス会などにご出席下さり、親しくお話し申し上げておりますので本日は参上させて頂きました。

また、昭和学院にお伺い致しますと、良いことがありまして、五年前、創立五十周年記念式典にお伺いしました後、実は、文部大臣を拝命致しました。文部大臣になり、最初に大臣室に入りました時、初代の文部大臣、森有礼さんの自筆の額が目に入りました。そこには「政府の仕事は、いろいろあるけれども、教育ということをあずかる文部省は、どの役所に比べても、一番大切な、他に比べることのできない、尊い仕事を

あずかったのである。この仕事を一歩でも、半歩でも、毎日すこしずつ前進するために、我々は命がけでつとめなければならない」という意味のことが書かれてありました。私はそれを最初に目にした時に、大変身の引き締まる思いがいたしました。明治の先人が、まだまだやることがたくさんあった時代に、教育こそは何よりも大切と考えて、それをあずかった森大臣が、命がけでやらなくてはと思ったことが、私に伝わってくるような気がしたからでございます。教育の重要性ということは、今も少しも変わっておりません。教育こそは、国にとって何より大切という気持ち、考えは変わらないと思います。

その教育の中で、特に昭和十五年という、あの時代に、女性の自立ということを、たぶん頭におかれたのだと思いますが、この昭和学院を創立されました。この建学の精神、私どもはその先見の明、大変な開拓の精神に、心から敬意を表さざるを得ないのであります。

いろいろな難しい問題に、その後お遭いになって、ずいぶんご苦労もおありだったと思いますが、すべて克服され、今日、このように立派な学校が、隆々と発展いたしておりますことは、ご関係の皆様のご努力、多くの方々のご協力のお陰だと存じますが、ほんとうにおめでたいことと、心より喜んでいるところでございます。

どうぞ、これからも、その建学の精神をふまえられまして新しい時代にマッチした良い教育を、多くの若い人たちに授けて下さいますように、そして、さらに広く地域社会全体のために貢献して下さいますように、心から願う次第でございます。創立六十周年、六十五周年、七十周年と、五年ごとのお祝いにも是非お伺い

したいと存じております。

お祝いのことば

奨学会会長　田　口　　堯

創立五十五周年おめでとうございます。私は、奨学会会長として祝辞を述べられることを、大変名誉なことと誇りに思っております。

昭和学院が立派に今あることは、学院長先生の献身的努力の結果であると思います。戦後五十年と言いますが、学院はそれよりも五年以前に、大変なご苦労をなさって、先代の伊藤友作先生が創立なされたと伺っております。生徒の皆さんは、本日の式典を節目にして、大いに飛躍して頂きたいと思います。

中国の諺に、「水くみを三年間させて、知識を与える」というのがあります。本人の忍耐と努力を養い、その性格を見極めてから知識を与える。充分教育をしてから、人を助ける武術、忍術を教え鍛える。世のため、人のためになるような人間を育てる。知識は学校で教えてくれる。技術は他人が教えてくれる。智恵は自分で作り出すものであると思います。これが家庭であり、学校であり、世の中、社会であると思います。

五十五周年という希望に満ちた節目の年を忘れずに、勉強運動に頑張り、昭和学院の生徒として、立派に成長して頂きたいと願っております。

第六節　学院長先生「傘寿の会」

一、傘寿の会

若葉きらめく平成八年五月二十一日、学院長・伊藤一郎先生が八十歳を迎えられたお祝いの会「傘寿祝賀会」がシェラトン・グランデ・トウキョウベイホテルで、多数のご来賓、お客様をお迎えして、盛大に挙行された。

祝賀会には、学院長先生ご夫妻、法人理事の皆様、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・栄養専門学校・短期大学・秀英中学校・秀英高等学校の教職員、父母三三五名が出席された。午後四時三十分、お客様の盛大な拍手の中を学院長先生ご夫妻が入場され、上甲高等学校教頭の司会で、まず、荒井短期大学副学長の開会の辞で始まった。発起人代表である久松高等学校副校長より挨拶、来賓を代表して伊藤節法人理事、小菅春江短大名誉教授、父母代表として中学高等学校奨学会会長田口堯様より来賓の皆様のご紹介、高橋国雄市川市長他多数の皆様から寄せられた祝電のご披露があった。理事長先生へ記念品が関本秀英副校長より贈呈され、花束を学院長先生ご夫妻に贈られ、満面の笑みが会場に輝き和やかな雰囲気の満ちあふれたところで、学院長先生より謝辞を頂くこととなった。先生は、八十年の来し方を振り返られると共に、健康管理につい

ても述べられ、出席者から盛大な拍手を送られた。大いに盛り上がったところで鈴木忠男前奨学会会長の御発声で乾杯となり、祝宴に入った。学院長先生は、各テーブルへ親しくご挨拶してまわられた。この間、伊藤富夫法人理事、渡辺誠之法人評議委員、村岡佳世子母姉会会長、平川中学副校長よりお祝いのテーブルスピーチがあり、まだまだ宴たけなわではあったが、午後七時近くに中條秀英中学校副校長より学院長先生の益々のご健康と、ご活躍をお祈りするとの閉会の辞でお開きとなった。

二、室内温水プールの整備

平成八年度、一段と整備されたものの一つに室内温水プールがある。水の清潔さを保持するために、塩素などの薬品を使用しているので、内部の鉄材の腐食や、プール内の機械類の故障が続いていた。このため、内部の塗装、破損部分の修理など、施設の改修がなされた。室内プールは、他校ではほとんど見られない本校の誇り得る施設なので、清潔に、しかも競泳に大きく役立つものと期待された。

三、中学校家庭科室・コンピューター室

平成八年六月に中学校館一階、印刷室の隣に念願の中学校家庭科実習室がつくられた。調理・被服両方の実習の出来る中学校独自の家庭科室である。最高級のダルトンの調理台七台、被服実習机四台（ミシン八台）が揃い、清潔な色で統一され、食器棚とともに調和のとれた教室となっている。以前は、中学校には被

服室しかなく、調理実習は高校の家庭科館の調理室を使用していた。低学年生徒にとって家庭科館への移動は多少遠くて休み時間内の到着が大変だったが、より一層の授業の充実と速やかな移動が可能となった。

同じく中学校館一階に、中学校コンピューター室がつくられた。中学校では三年生で選択教科として情報教育を行っているが、中学校独自のコンピューター室の完成によって、より充実した教育が期待された。

四、書道教室・書道展示室

平成九年に入り、高等学校本館一階に、平素の高等学校の書道や中学校の書写の授業で生徒達が書いた優秀作品、書道研究部の全国表彰の作品などを展示できる、書道展示室が完成した。床には絨毯を敷き、作品は大作から半紙作品も展示されるようになっており、常時展示もある。また、展示室の横に書道教室も誕生し、中学校高等学校の書を通した情操教育の充実がなされると共に、一般生徒・書道研究部員の素晴らしい作品が制作され、参観者を喜ばすよう期待された。

五、中高運動部の活躍

ハンドボール部は、平成八年十月十二日から十七日にかけて広島県甲田市で行われた秋季国民体育大会に出場した。春に行われた全国高校選抜大会では惜しくも敗れた石川県の小松市立女子高校と第二回戦であたり、雪辱を果たした。それを励みに準決勝まで勝ち進み、第三位という成績を残して幕を閉じた。ハンドボ

ール部は、翌九年三月に名古屋で行われた第二十回全国高校選抜大会に関東を代表して出場を果たしている。

また、中学校新体操部は顧問の根本・飯島両先生のご指導の下、八月二十五日より二十七日にかけて愛知県碧南市で開催された全国中学校総合体育大会新体操大会において団体総合第五位に入賞した。

なお、山梨県甲府市を中心に行われた、平成八年度全国高等学校総合体育大会へは、本学院のハンドボール部、テニス部、水泳部、バスケットボール部、陸上部、卓球部の六部から選手五四名が出場している。

第七節　日本学生科学賞文部大臣奨励賞受賞

一、文部大臣表彰

本学院高等学校副校長久松英壽先生は、中学校教育制度発足五十周年にあたり、中学校教育の発展に尽くされた功績により、教育功労者として平成九年十月三十日、文部大臣から表彰された。本県から一名、全国で私学関係者二六名ということであった。当日は、天皇陛下がご台臨なされた。久松先生は、研究心に富み創意工夫をもって事に当たる方で、中高一貫教育に早くから取り組み、視聴覚教育の面でも造詣深く、また新入教員研修にも力を入れ、教員資質の向上に努められた。活動の場は広く、前年度は全国私学研究集会（山形県で開催）に新入教員研修の指導者として、招聘された。その他、教職員の指導、助言に努め、学校法

人の理事としても活躍してこられた。既に千葉県知事表彰を受けられ、この度の受賞は、本人のみならず学校として大変光栄であった。

学院長先生が発起人となり、十一月二十五日午後五時から浦安の第一ホテル東京ベイにおいて、祝賀会が催された。会場には、公私立の校長・教頭、法人役員、教職員、ご父母の方々等約三〇〇名が出席され、学院長先生はじめご来賓の皆様からお褒めの言葉や励ましのお言葉をいただいた。

二、文化面でも全国受賞に輝く

平成九年十一月下旬に行われた第四十一回「日本学生科学賞」の入選者が発表され、高校二年瀧ヶ崎和子さんの「茶柱の研究―物理的考察を通して―」が文部大臣奨励賞という輝かしい受賞に浴した。中央表彰式は翌十年一月十九日、都内のホテルで行われた。本賞は、科学界の甲子園といわれ、祖母の自家製のお茶作りに興味を持ち「茶柱はなぜ立つのか」という身近な現象を自然科学の研究対象ととらえ、挑戦していく姿勢が認められたものである。瀧ヶ崎さんは、県審査を兼ねた第四十一回千葉県児童生徒科学論文展においては、理科教育部会長賞をいただいたが、前年の「しずくの研究」に続いて二年連続の入賞となった。副賞として、最新のコンピューターが学校へ寄贈され、学校の備品として活用されることとなった。また、日本学生科学賞受賞者である瀧ヶ崎さん他三名は日本代表として、平成十年五月十日から一週間にわたり、米国テキサス州のフォートワース市で開かれた第四十九回国際学生科学技術博覧会（ＩＳＥＦ）に参加、出品した。

米国・欧州・アジア・アフリカなどの三四ヵ国・地域からそれぞれの地区コンクールを突破した一、一二五人が参加する、世界の科学の祭典である。残念ながら入賞は逃したが、「茶柱」という日本の風習を世界に伝えると共に、瀧ヶ崎さんはオープニングセレモニー・一般公開の間、浴衣姿で説明に立ち、来場者や他国の学生と積極的に交流を深めてくれた。

高校一年の平松奈津子さんは、新聞記事を自分なりのテーマで切り抜き、新聞の面白さを実感してもらう全国新聞教育研究協議会・朝日新聞社主催、第四回「朝日・新聞スクラップコンクール」において、「社説のスクラップ」が審査員特別賞を受賞した。全国一、七四二点の中での素晴らしい栄誉である。我が高校では一年の「現代社会」の授業の一環として、新聞記事を切り抜いて、感想を書くことが夏休みの課題ともなっている。毎日、切り抜いた社説を大学ノートの左側に貼り、一時間かけて繰り返して読み、要約と感想を右側のページに記している。平松さんの毎日の努力の積み重ねが、本受賞につながっている。

高校三年の竹内友季子さんは、書の甲子園とも言われる国際高校選抜書展で優秀賞を受賞、書道検定でも一級を取得した。平成十年一月に行われた書き初め展でも竹内さんは「県教育長賞」、大東文化大学全国書道展では「推薦賞」を受賞した。他にも二年生の松丸有希子さんが「大東書道大賞」、大正大学全国書道展では三年生の入江恵美さんが「平凡社賞」を受賞し、書道研究部のレベルの高さを全国に示した。なお、これらの作品は、平成九年度高等学校本館一階に誕生した書道展示室に展示された。

ここ数年の間にめざましい飛躍が見られたクラブの一つに、中学・高校バトン部が挙げられる。前年度も

中学・高校とも日本武道館で開かれた全国大会に出場、名古屋で開かれた「九六ドリルチーム日本大会」でも準優勝となっていたが、平成九年度も九月二十一日に東京体育館において第一回ジャパンカップに千葉県代表として出場し、メジャレット部門で軽快な演技で好評を博し第三位入賞を果たしている。

第八節　高校本館大改装

一、高校本館大改装

高校本館は、昭和三十八年四月に完成した学院初の四階建て鉄筋校舎であった。学院創立以来二十有余年を経た老朽校舎に代わり新たに建築されたもので、教室数二〇、管理部門として校長室・事務室・職員室・会議室・医務室があり、延べ面積三、一一〇・一八平方メートルと大型の校舎である。

しかし完成以来三十四年を経過し、一部老朽化も進んできていた。これまでも何度か改修工事が行われたが、大規模な改装工事を施す必要が生じた。そこで夏季休業期間に入るのを待ち、平成十年七月下旬から約一ヵ月

改装なった教室の壁面とドア・手洗い

をかけて、工事が行われた。改装内容は、本館一階から三階の各教室の壁と天井を白く塗り替え、床材もタイルから塩ビシートに張り替えるというものであった。また、廊下と教室との間仕切りをアルミパーテーションに切り替え、ドアも従来のドア式のものからアルミ製の引き戸に交換した。さらに手洗い台が洗面化粧カウンターになり、廊下・階段の床もすべて塩ビシートに張り替えた。これによって明るく衛生的で使いやすい校舎になった。

二、各運動部の活躍

平成十年度も各部の活躍にはめざましいものがあった。四国四県で開催された全国高校総体には、バスケットボール部・ハンドボール部・ソフトテニス部・卓球部・陸上競技部・水泳部の六部が出場を果たした。

バスケットボール部は第一回戦で北中城（きたなかぐすく）高校、二回戦で東筑紫学園高校、三回戦で山形商業高校を圧倒的強さで打ち破り、準々決勝では強豪東京成徳高校と対戦した。結果は七九―七一で勝利し、いよいよ準決勝へと駒を進めた。準決勝の相手、名古屋短大付属高校（現桜花学園高校）とは大接戦を繰り広げたものの、わずかに勝利には届かなかった。とはいえ、全国第三位と上位入賞を果たすことができた。

その他では、ハンドボール部が三回戦進出、ソフトテニス部が団体戦ベストエイト、個人戦では北島・平岡組が四回戦進出、卓球部は個人戦ダブルスに石井・斉藤組が出場、陸上競技部は四〇〇メートルで益子選手が準決勝進出、水泳部は個人メドレーに佐藤選手が出場した。

続く秋季国体は神奈川県で開催され、ハンドボール部、ソフトテニス部、バスケットボール部（松井美緒選手）が出場を果たした。ソフトテニス部は三回戦進出、松井選手が出場した千葉県代表は二回戦に進出した。また大阪で行われた第二十二回春の全国高等学校選抜大会に、関東代表としてハンドボール部が出場した。実に六年連続十七度目の快挙であった。

三、教育活動の成果

平成十年度は、本学院の生徒が中心になって行われる体育祭・文化祭も盛大に開催された。体育祭は「風にのれ、高なる鼓動」のテーマのもとに、高等学校が十月十日（体育の日）、中学校がその翌日に挙行された。十一月二日・三日の文化祭は「輝く歴史・花開く未来」をテーマに盛大に行われた。

また本学院図書館では、毎年読書週間の恒例で文化講演会を開催している。十一月に、世界絵本原画展で「金のりんご賞」を二度受賞した絵本作家、梶山俊夫氏を迎えた。講演タイトルは「永遠の子どもたちへ」で、ご自身の疎開先での経験を中心に、子ども時代の柔らかい感性を大切にしようと訴えるものであった。

また本学院母姉を対象にした母姉会講演会が翌十一年二月に開かれた。講師は子ども家庭教育フォーラム代表・富田冨士也氏で、「聞いてほしいな　子どもの気持ち」と題して、「弱音こそ子どもの本音」であるとして、「本音の感情交流を図ることこそ、子どもの生きるエネルギーを求めることとなる」と力説した。

第九節　玄関ホール・二号館・三号館大改装

一、玄関ホール改装

本来であれば平成十年度の夏季休業中に実施する予定であった正面玄関周辺の改修工事は、工事期間の関係で翌年に持ち越されることになった。施設は明るく近代的なものをめざして設計され、平成十一年七月中頃から工事に入り、予定通り九月には完成した。正面扉のガラス面は広くなり、間接照明を設置し、木目調の壁と相まって、暖かく優しい雰囲気になった。事務室の窓口も大きくなり、大理石を使った受付も一新された。この際、旧玄関ホールの象徴ともいえる「明譲像」（新井喜惣次作）は、大講堂横の庭園の一角に移された。また平成九年度の本館改修工事に続いて、同様に二号館（中学校館）、三号館の改修工事が進められた。これによって生徒の学習環境が大幅に向上することになった。

明るく改修された玄関ホール

さらに創立六十周年を直前に控え、創立記念館の改修も進められた。この建物は本学院唯一の木造建築で、当初千葉市長洲町（現千葉市中央区長洲町）に建てられたものを、昭和十八年に学院敷地内に移築したもの

である。これまでお茶の手習い、琴の練習場などの文化活動に使用され、母姉の会食にも利用されてきた。長年の風雪に耐えてきたところであるが、毀損するところも目立ってきたため、戸障子、廊下の絨毯、カーテン、その他の補修を施した。

二、活躍する運動部

平成十一年度も多くの運動部が全国的に活躍をした。

岩手県で開催された全国高校総体には、バスケットボール部・ハンドボール部・テニス部・卓球部・陸上競技部・水泳部の六部が出場した。ハンドボール部は三回戦、バスケットボール部は四回戦に進出した。また陸上競技部の山口愛選手は、四〇〇メートル競技で四位に入賞した。

また中学校運動部の活躍もめざましく、バレーボール部・バスケットボール部・新体操部が県大会で優勝し、関東大会には五部が出場した。特にバスケットボール部は、関東大会では準優勝であったが、福井市で行われた全国大会で次々と勝ち進んでいった。決勝では折尾中（福岡県）と対戦し、大接戦の末惜しくも五点差で涙をのんだ。この結果、全国第二位となった。

三、教育活動の実践

生徒主体の二大行事である体育祭・文化祭は、平成十一年十月十日（体育の日）に高校、翌日に中学校の

体育祭が「飛び出せ大地　夢はせて」のテーマのもとで行われ、成功裏に終わった。また十一月二日・三日には文化祭が「新たな未来　ふれあう心」のテーマで挙行された。西暦二〇〇〇年、ミレニアムにちなんだ展示が随所にみられた。

本学院中学校・高等学校の特色として、独立した三階建ての図書館と専門の司書教諭二名を有していること（当時）が挙げられる。より一層図書教育を進めるという観点から、この年から読書期間中に「全校一斉朝の読書」が行われるようになった。朝自習の時間を使って、全校生徒・教師全員が一斉に読書をし、朝のひととき、静けさと落ち着きを持とうという狙いで始められた。

平成十一年読書週間恒例の第二十八回文化講演会も開催された。今回は『最後のトキ』（金の星社）の作者である児童文学者・国松俊英氏を講師に迎え、「鳥も人も地球の仲間」と題して、自然環境がますます悪化する現在、鳥も人も地球の仲間として幸せに生きてゆくには何をすべきかを、新潟トキ保護センターの活動を中心に語ってくれた。

母姉対象に翌十二年二月に行われた母姉会文化講演会では、フリーキャスター安藤梢氏を講師に、「私の子育て、私の生き甲斐」と題する講演が行われた。知的障害を持つダウン症児の子育てを通じて、母子の絆をより強固なものとしていった経験が語られた。

第十節　創立六十周年記念

一、創立六十周年記念事業

平成十二年度は創立六十周年の祝賀ムードにわいた一年だった。施設面では、全学の冷暖房施設の整備がもっとも大きな変化だった。設置箇所は一七七室で（そのうち中学校・高校は一〇七室）、ガスヒートポンプエアコンが天井から吊り下げられる形で設置された。それに必要な経費は約四億円となり、京葉ガス本社・金子電気工業所と契約を交わし、工事は平成十一年二月から始まり予定通り進んだ。その結果、七月一日より稼働することができた。

創立六十周年記念式典は平成十二年十月二十一日に本学院大講堂で盛大に執り行われた。当日は生徒を除く出席者（来賓・父母・卒業生）は実に一、三六六名を数えた。

学院長が式辞で創立当初の苦難の時期、創立者自らが定めた建学の精神「明敏謙譲」について話し、これからの学院の課題について大要を述べた。

祝賀会で恩師と旧交を温める卒業生

ついで本学院教育に対する功労者・永年勤続教職員の表彰があり、多くの来賓から祝辞を受けた。記念式典は約二時間にわたり執り行われ、第一体育館での祝賀会に移った。

正午から開始された祝賀会では、和やかな雰囲気の中で、喜びに溢れた宴が催された。卒業生の中には、恩師や級友と久しぶりに再会し、尽きない歓談があちらこちらに見られた。こうして記念すべき創立六十周年の記念行事は、学校を挙げて成功裏に終えることができた。

二、各運動部の活躍

平成十二年度も運動部は大いに活躍した。岐阜県を会場とする全国高校総体には、バスケットボール部・ハンドボール部・テニス部・卓球部・陸上競技部・水泳部の六部が出場した。またバスケットボール部の田中里佳選手が、全日本ジュニアの代表選手として、十二月にインドのニューデリーで行われた第十五回アジア女子ジュニア選手権大会に出場した。田中選手は全試合スターティングメンバーで出場し、ジャパンチームの得点ランキング第二位となり、チームの準優勝に大きく貢献した。翌十三年三月に行われた春の高校選抜大会には、ハンドボール部・新体操部・ソフトテニス部の三部が出場を果たした。

三、教育活動の成果

創立六十周年を迎え、平成十二年十月八日（中学校）・十月十日（高校）に体育祭が実施された。テーマは

「輝く六十年　二十一世紀をめざして」と題し、創立六十周年にちなんで、学年競技に工夫が加えられた。また昼の催し物でも「祝六十・はばたけ昭和　理想は高く」の横断幕を掲げ、太鼓と現代版のソーラン節と大漁旗で盛り上げ、好評であった。

文化祭も創立六十周年を記念し「輝かし伝統の華　六十年」というテーマで、全校生徒と職員が、発表に学年展示に頑張り、例年を超える充実した取り組みになった。

平成十一年度から開始された全校一斉朝の読書は、この年も実施され、定着した感があった。読書週間恒例の図書館文化講演会も第二十九回を迎えた。講演者は『花咲か』など数々の著名な作品を世に出している児童文学作家・岩崎京子氏で、「いま伝えたいこと　〝本〟って何だろう」と題する講演を行った。また翌十三年二月の母姉会文化講演会では、宇宙飛行士向井千秋さんの母である内藤ミツ氏を講師に迎え、「娘は宇宙飛行士」と題する講演をお願いした。結婚し母となってからの子育ての苦労、平成六年七月四日に娘が乗ったスペースシャトル・コロンビア号の打ち上げを直前に迎えた時の辛い気持ちなど、「母の心」というものについて存分に語ってくれた。